

第Ⅳ章 まとめ

第1節 周溝状遺構について

周溝状遺構とは、周溝が円形・方形・隅丸方形・楕円形などの平面形態をもち、周溝で画された内側部分において施設を持たない遺構のことである。周溝状遺構が認められる時期については、主に弥生時代中期～後期にかけてであり、特に後期から始まり後期の内に終わる事例が顕著である。宮崎県内についても、当該時期に多く認められる遺構である。周溝状遺構の分布については、九州・四国・近畿・北陸・関東地域で確認されていることから、全国的に広がる可能性が高く、九州においては北部九州地域に多く認められる。南九州地域においても周溝状遺構は一定数が確認されており、宮崎県内では都城盆地に密度が高いことが指摘されている（片岡 1994）。宮崎市内においては、8 遺跡 28 例が確認されている。市内で検出されている周溝状遺構の多くは、単独で存在するものもしくは、少数の周溝が連結するものであり、中須遺跡と同様に複数の周溝が連結している例としては、現状のところ桜町遺跡のみである。周溝状遺構の性格については、周溝墓、住居、平地式建物、祭祀施設等々の諸説が想定されており、未だ定まっていない状況である（片岡 1989・1991・1994・1996、岡本 1998）。

中須遺跡で検出された周溝状遺構は、出土遺物より概ね中期中葉～後葉に位置づけられることから、比較的古い段階に属するものと考えられる。そのため、本遺跡の周溝状遺構を検討することは、周溝状遺構の出現過程を知るうえで非常に重要であると考えられる。ここでは検出された周溝状遺構の観察で得られた特徴についてまとめた上で、周溝状遺構の機能ないし性格について若干の考察をおこないたいと思う。

中須遺跡における周溝状遺構の特徴については、平面形態の種類として円形、不整形な円形、隅丸方形があり、一辺の溝を共有させ複数の周溝状遺構が連結するものと2基の周溝状遺構が連結するもの、単独で存在するものがある。周溝で画された内側には、柱穴あるいは土坑などの痕跡は見られない。また、周溝状遺構の中心部から周溝内への土の流れ込みも認められなかったため、内側部分において盛土がおこなわれていた可能性は低い。周溝内の埋土は概ね自然堆積であり、人為的な埋め戻し痕跡は見られなかった。周溝はある程度埋没した後に、再掘削されている痕跡が確認できることから、一定期間周溝として機能していたものと考えられる。周溝底面は平滑に構築されているものが多く、周溝幅の細いものは底面の彎曲が強い。周溝内の壁面や底面についても、何らかの施設等の痕跡は見い出せなかった。出土遺物については、弥生土器と加工木材が検出されており、弥生土器は甕・壺・高坏の順に出土数が多く、加工木材は木杭や加工痕の残る不明部材である。弥生土器については、完形品がなく、ススの付着や吹きこぼれ痕跡が認められる特徴から、日常的に使用した土器が周溝埋没過程に廃棄されたものと思われる。

中須遺跡で検出された周溝状遺構の最大の特徴は、複数の周溝状遺構が連結して存在することである。周溝の切り合いが見出せたものは周溝状遺構3・4の一例のみで、周溝状遺構4埋没後に周溝状遺構3が構築されている。その他、単独で存在する周溝状遺構5と11以外の周溝状遺構においては周溝の一辺が連結しており、埋土の一部を共有させるものがあることから、

一定期間、併存関係にあったと判断できる。

併存関係にあると考えられる周溝状遺構を列挙すると、周溝状遺構1・2、周溝状遺構6・7、周溝状遺構7・8・9・10となる。ただし、周溝状遺構1・2、周溝状遺構6・7、周溝状遺構9・10については、一方の周溝がもう一方の周溝に取り付くような平面形態を呈していることから、それぞれ、前者の周溝状遺構の存在を前提として後者の周溝状遺構が付加されているように観察できる。平面形態の状況から見た掘削順を整理すると、周溝状遺構1→周溝状遺構2、周溝状遺構6→周溝状遺構7、周溝状遺構9→周溝状遺構10となる。また、周溝状遺構1・2、周溝状遺構7・9、周溝状遺構11においては再掘削の痕跡が認められた。このことから、周溝状遺構は周溝の掘り直しをおこないながら継続的に使用されていたことが推察される。一方で、周溝状遺構8のように一時期併存関係にあるが、埋没後に再掘削されないものも認められる。中須遺跡で検出された周溝状遺構は、構築段階の僅かな時間差が見い出せるものの、使用段階においては継続的な併存関係にあったと考えられる。

以上を踏まえた上で、周溝状遺構の性格について考察をおこないたい。まず、周溝墓という可能性についてであるが、中須遺跡で検出された周溝状遺構の様相から考えると、いずれの周溝状遺構にも土坑などの痕跡が見られず、周溝堆積土に盛土の崩落土の痕跡も見られない。また、複数の周溝が連結することや、周溝内を再掘削する造作が見られることから周溝墓と様相を異にする。出土遺物にかんしても、日常的な弥生土器と加工木材あるいは木杭であることから周溝墓にともなうものとは到底考えられないため、周溝墓である可能性は低い。

次に、祭祀施設という可能性についてであるが、遺構の形状からは祭祀施設であるかどうかについて判断できる材料がない。出土遺物の中にも、祭祀施設と認定できるような遺物が認められないため、祭祀施設とも考えることはできない。

最後に住居ないし平地式建物という可能性についてであるが、中須遺跡で検出された周溝状遺構は柱穴等の上部構造を推測できる痕跡が見出せず、検出した周溝状遺構の中で最小のものは長軸2.1mで床面積が非常に狭い。また、連結する周溝状遺構は併存関係にあり、周溝内を埋め戻すことなく周溝として機能していたことから考えると、住居としての利用は考えにくい。平地式建物については壁立ちの構造が想定されているが、中須遺跡の周溝内において何らかの施設を示すような痕跡は見出せなかった。前述のとおり周溝状遺構は連結し、それらが併存関係にあること、周溝としての機能を継続的に果たしていたことを考えると、周溝の内外に施設の痕跡を残さず、また人為的に埋めることなしに壁を構築することは非常に難しいと思われる。

以上のように、中須遺跡で検出した周溝状遺構の性格について遺構の構造や遺構内の出土遺物からは明らかにできなかった。しかし、周溝状遺構を含めた調査区内の遺構の性格を考える上で非常に示唆的なのが、出土遺物の中に未加工や加工痕のある木材や石材、それらを加工した道具である石器や鉄器が出土していることである。このことを積極的に解釈すると、当遺跡周辺は生活用具製作の場であり、作業場あるいは材料及び道具を貯蔵するための施設の存在が想定される。周溝状遺構に隣接して検出された掘立柱建物について、周辺の状況から住居でない性格、すなわち倉庫ないし作業場としての機能を考えうるとすれば、周溝状遺構もまたそれに近い性格を持つことが考えられる。今回、周溝状遺構の性格について新たな可能性を指摘できた。その成否については、今後の調査成果を踏まえた上で検討を重ねる必要がある。

第2節 弥生時代中須遺跡の性格

今回の調査は、産母川の河川改修にともなって実施された事前の埋蔵文化財発掘調査である。今回の調査では多くの遺構や遺物が確認されたが、そのほとんどのものが弥生時代に位置付けられるもので、その他の時期に属すると明確に判断できるのは、1条の溝状遺構のみであった。したがって、ここでは弥生時代の中須遺跡について調査成果を中心としながら、その性格について検討することでまとめたい。

遺跡は、宮崎市街地を流れる大淀川的作用によって宮崎市海岸部に発達した4本の砂丘列の内、縄文時代後晩期に形成されたと見られる第1・2砂丘の間にある砂丘間低地に所在する。弥生時代当時には、第2砂丘が海岸に接していたと考えられているため、遺跡のある砂丘間低地は、海岸のすぐ後背にある低地であり、現在の一ツ葉入り江のような入江、あるいは低湿地のような地形であったと思われる。遺跡はその中において第1砂丘から突き出したわずかに高まった微高地の先端付近に位置していた。

今回の調査で出土した土器は、入来式段階から山ノロ式段階にかけての資料である。一部に後期初頭にまで下る可能性があるものの、最も中心となる時期は山ノロⅠ式段階である。したがって、今回の調査で確認された各遺構は、弥生時代中期中葉から後葉にかけてに位置付けられ、中でも弥生時代中期中葉がその中心と捉えられる。遺物の出土状況からは、各遺構間で積極的に時期差を認めうるような状況でなく、多くの遺構がある程度の期間併存しながら存在していたものと考えられる。

今回検出された遺構は、周溝状遺構、溝状遺構、掘立柱建物、杭列、土坑、ピットである。これら遺構はそれぞれまとまった分布状況を示していた。

溝状遺構1・2は、微高地を囲むように掘削されていた。遺構は、この2本の溝より標高の高い側、すなわち微高地の平坦面側に集中して検出されていることから、溝状遺構1・2は土地の区画を目的として掘削されたものと判断される。11基確認された周溝状遺構は、溝のすぐ西側に南北に連なるように分布していた。切り合いや掘り直しがおこなわれながら、同じ場所に継続的に配置されたことがわかる。掘立柱建物は、今回の調査においては、溝状遺構1・2で区画された最も内側に近い位置に配置されていた。確認された3棟の掘立柱建物は、いずれも東西方向に長軸を持ち、ほぼ等間隔に南北に並んでいる状況であった。6基確認された土坑は、周溝状遺構と掘立柱建物の中間に、ちょうど掘立柱建物を囲むようにして分布していた。杭列は、溝状遺構1・2で区画された内と外がつながる通路状部分のちょうど外側において確認された。

こうした各遺構の一定の場所への配置の継続性からは、各種の遺構がそれぞれに役割を異にしながら計画的に配置されている様子をうかがうことができ、当地が何らかの役割・意味をもつ明確な場として機能していたことを推測させる。このほかにも、溝状遺構1に設置された貯木遺構と思われる部分などにも注目される。

今回の調査での出土遺物の中心は弥生土器である。器種構成は、甕、壺がほとんどでそれにごく少量の高坏と小型の鉢が加わる。甕にみられる二次的な強い被熱痕跡やススの付着、吹きこぼれ痕跡の存在などからみて、これらの土器は日常生活に供されたものと言える。この時期の宮崎平野部の特徴として、搬入土器が多いことが従前指摘されているが、中須遺跡において

も同様の状況であった。今回の調査で出土した土器を、胎土を中心としながら検討した結果、おおよそ半数ほどが他地域からの搬入品であることが明らかとなった。最も多かったのは、下城式、小川原式などの豊後系の土器である。このほかの産地には、豊前を含む東北部九州、瀬戸内、大隅などが認められた。これら土器の系統については、在地の入来・山ノ口系のものよりも他地域系統のものが多く、甕、壺とも須玖系など東北部九州系のものが多数を占めていた。これらのほとんどは在地産であったことから、中須遺跡においては須玖系を中心とする東北部九州の土器を受容し在地生産していたものと思われる。これらは器壁も厚く、形態にも若干の変容が認められ、在地化が進んでいる様子が看取できる。豊後系の下城式、小川原式は豊後産のものが多くどの器種にも安定的に存在する。高坏はいずれも豊後系、豊後産であった。当地域における土器生産と流通は、産地と系統が複雑に交錯する状況であり、今後これらの詳細な検討をおこなったうえで、その動態を明らかにする必要がある。

石器は、製品としては磨製石鏃、石斧、敲石、磨石、砥石が出土している。数量的には敲石、磨石、砥石が多い。そのほか、いわゆる樹皮布敲石とされる石器も確認されており、注目される。また、海岸部の遺跡で多く見られる加工痕跡のある軽石も認められたが、製品か否か明確でない。加えて、未製品が多く認められることにも注目できる。石斧の未製品や磨製石鏃の未製品が多く見られた。特に磨製石鏃にかんしては、素材となる剥片を得るための大型の石材から、素材剥片、三角形に近い形まで整形されている剥片など、製作各段階の資料が認められた。石斧は製作途中で折損したことなどから敲石などへ転用されたものなども存在する。砥石の中には幅の広い溝状の使用面を持つものが存在しているが、これらは石斧の製作に使用されたものである可能性がある。

木製品、木材も一定量出土している。明確に製品と認めうるものの中では木杭が最も多かった。その他の製品は少なく、石斧が装着された柄、鋏、アカ取り状の不明木製品などが見られたのみであった。これ以外は、加工痕跡が認められる木材であり、主に棒状製品の両端部に切断時のものと考えられる工具痕跡が認められる。柄状のものや二叉状の形態となる木材なども見受けられ、何らかの製品に加工する以前の未製品であったのではないかと考えられる。これらの木材は溝状遺構1に設置された貯木施設と見られる遺構から多く出土しており、加工に際して水漬けされていた木材である可能性が考慮される。今回の調査で最も注目を集めたのが、柄付の石斧である。ほぼ完形で、当時の石斧の装着方法や使用法を知る上で重要な情報を得ることができる資料である。出土した木製品・木材については、樹種同定を実施した。使用されている木材は、エノキ属、シイ属、ヤマグワなど二次林種が最も多く、合わせて、わずかではあるがセンダン、タイミンタチバナなど海岸的要素を持つ樹種なども確認された。このことから、中須遺跡での木材使用は周辺に形成された二次林に生育する樹木を中心におこなわれていたとみなされた。この他に、ヒョウタンの果皮や樹種不明であるが樹皮が出土している点にも注目しておきたい。

鉄器は、鑄造鉄斧片が1点確認された。遺構外からの出土ではあるが、今回の調査においては、弥生時代以外の時期の遺物はほとんど認められないこと、遺物自身の形態的特徴から見て、弥生時代の鑄造鉄斧片として考えてよいと思われる。鑄造鉄斧の破片を再加工し利用した加工具と見られる。中須遺跡で出土した木製品、木材に残された加工痕跡は、いずれも鋭利であり

その加工には鉄器が用いられていたものと考えられたが、その加工に今回出土した鑄造鉄斧片などが用いられていたものと考えられる。

最後に弥生時代中須遺跡の性格について、上記調査成果をもとに検討しておく。中須遺跡周辺の土地利用は、基本的に遺跡の東西にある第1・2砂丘上を居住地として、そして砂丘間の低地については、湿地的な環境を活かした稲作を中心とする食糧生産の場として利用されていたと考えられている。しかし、中須遺跡では周溝状遺構をはじめとする各種遺構が検出されており、食糧生産の場でなかったことは明らかであると言える。また、今回の調査においては堅穴住居などの居住に関わる遺構も確認されておらず、居住の場であることもまた積極的に肯定できない。近隣の砂丘上において当該時期の堅穴住居が確認されていることから見ても、立地的にも居住の場はやはり砂丘上であったと考えるのが自然である。

こうした状況の中、中須遺跡の性格を考える上で最も注目されるのが、石器や木器の未製品の存在である。石器に関しては、上述の磨製石鏃や石斧の未製品のほか、玉髓やチャートといった石材も確認された。木器も製品よりも未製品が圧倒的に多く、溝状遺構1など加工前の木材を貯蔵していたと思われる場所も存在する。これらの調査結果を踏まえれば、中須遺跡は生活用具を製作する生産の場として機能していたと考えるのが最も妥当に思われる。木器の加工に用いられたと思われる鉄器や、石器製作に用いられたと思われる磨石や敲石などの存在もこれを裏付けるものと言える。このほか、樹皮布製作に用いられたと目される樹皮布敲石と類似した石器の存在からは、木器、石器のみならず、様々な生活に関わる用具が製作されていたことを想起させる。今回の調査では周溝状遺構や掘立柱建物の用途については明確にすることができなかったが、前節で検討したように、周溝状遺構や掘立柱建物は生産に関わる素材や用具などの物資を保存、保管するなどの機能を持った施設であった可能性が考慮される。

当地は、海岸に近く、素材となる石材や、加工具である鉄器などを入手するための交易に至便な場所であったに違いない。また、低地という環境であり木材の貯蔵や加工に必要な水を得やすいという環境も相俟って、当地が物資の集積と生活用具製作が同時におこなわれる場所として選択されたものと考えることができる。

今回の調査によって、弥生時代における宮崎市海岸部の様相の一端が明らかにされた。しかしながら、各遺構の具体的な機能と配置の意味など検討されるべき事柄も残された。加えて、砂丘上の居住地を含めた集落全体の様相と、物資の入手などにかかる他地域との交流のあり方など今後検討されなければならない課題は多い。

《参考文献》

- 石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描（Mk. II）」『宮崎考古』第9号
 稲岡洋道編 2000『黒太郎遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第45集、宮崎市教育委員会
 上原真人 1991「農具の変遷（鋤と鋤）」『季刊考古学 稲作農耕と弥生文化』第37号 雄山閣
 岡本淳一郎 1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『紀要 富山考古学研究』創刊号 財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所
 片岡宏二 1989「周溝状遺構」の検討（その1）」『福岡考古』第14号、福岡考古懇話会

第2節 弥生時代中須遺跡の性格

片岡宏二 1991「周溝状遺構」の検討（その2）」『福岡考古』第15号、福岡考古懇話会

片岡宏二 1994「周溝状遺構」の検討（その3）」『福岡考古』第16号、福岡考古懇話会

片岡宏二 1996「周溝状遺構」の検討（その4）」『福岡考古』第17号、福岡考古懇話会

河野裕次 2013「南部九州における弥生時代中期土器様式圏の動態」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会

君嶋俊行編 2012『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告8 木製農工具・漁労具』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告47 鳥取県埋蔵文化財センター

栗山葉子・山下大輔編 2008『横市地区遺跡群平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集、都城市教育委員会

鈴木重治・野間重孝編 1976『石神遺跡』宮崎市文化財調査報告書第1集 宮崎市教育委員会

竹中克繁編 2008『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第60集、宮崎市教育委員会

茶谷満・家塚英詞 2008『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告3 建築部材（資料編）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告24 鳥取県埋蔵文化財センター

茶谷満編 2009『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告4 建築部材（考察編）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告25 鳥取県埋蔵文化財センター

坪根伸也ほか編 2005『下郡遺跡群Ⅲ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第61集 大分市教育委員会

鳥枝誠編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第33集、宮崎市教育委員会

中園聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会

禰宜田佳男 1999「伐採石斧の柄」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室

稗田智美ほか編 2010『下郡遺跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集 大分市